

〈書 評〉

藤原 彰著

『南京大虐殺』(岩波ブックレットNo.43)

(早稲田大学教授) 由井 正臣

(一)

1982年の「教科書問題」をめぐる近隣アジア諸国の批判は、近代日本の朝鮮、中国、東南アジア諸国への侵略が、アジアの民衆にどれほど痛苦にみちた体験として記憶のなかに蓄積されているかを、改めてわれわれに思い知らせた。「南京大虐殺」もその1つである。

1970年代をつうじて、「南京大虐殺」をめぐるてはげしい論争が展開された。事件の事実を認めその真相をあきらかにしようとする人びとと、事件を「まぼろし」であるとする人びととの評価は大きく違いを見せている。

論争は、「教科書問題」を契機に新しい展開をみせようとしている。1つには、「南京大虐殺」に関する新しい史料が公表されてきたことである。たとえば、南京攻略に参加した第16師団長中島今朝吾の日記や虐殺に直接たずさわった兵士の日記、証言などである。これらはいずれも「虐殺」の事実を証明するものである。

反面、軍事大国化の方向にむかいつつある政治状況を反映しながら、「南京大虐殺」を否定する意見も強まっている。旧軍人による「南京大虐殺」の教科書記述は「虚偽の風聞に基くもの」であるから抹消せよとする訴訟がおこされたことは、その典型であろう。

こうしたなかで、われわれの目をひくのは、旧陸軍将校の親睦団体である偕行社の機関誌『偕行』が「証言による南京戦史」を連載し、改めて「南京大虐殺の虚像」を反証しようとしたことであった。この連載は最終的に、『偕行』編集部の責任で、その結論を発表している。そのなかで編集部

は、日本軍が不法に殺害したのは「一万三千人はもちろん、少なくとも三千人」であるとして、「この大量の不法処理には弁解の言葉はない。旧日本軍の縁につながる者として、中国人民に深く詫びるしかない。まことに相すまぬ」と謝罪した。このことは、旧軍人の良識的な態度として評価できよう。しかし虐殺の数が3000人、多くても1万3000人ということには問題がある。ここにはある意図が感ぜられる。つまり、新しい史料、証言などの出現と実証研究によって虐殺の事実を否定しきれなくなった結果、虐殺された人数をできるだけ少なくみせようとする作為が働いているのではないか。いわば、虐殺否定論の一定の軌道修正ではないかということである。

本年4月21日の『毎日新聞』は、中国の『北京日報』の論評を報じている。それによると『北京日報』は『偕行』誌上の「独自調査」の結論を「今なお中国侵略戦争の犯罪行為を覆い隠そうとする動き」であるとしてきびしく批判している。このことは、日中両国民の「南京大虐殺」についての認識の落差の大きさを示すものとして注目される。日本国民として、この事件を直視し、その真実をあきらかにしていくことはきわめて重要であるといわねばならない。

(二)

以上の意味で、今回の藤原彰氏の『南京大虐殺』が刊行されたことは、まことに時宜に適したものであるといえよう。

本書は、400字原稿用紙にして70～80枚という小冊子であるが、事件の全体像を簡潔に提示している。従来の研究は、この問題が論争的に扱われてきたために、ともすれば全体の輪郭がつかみにくいという面があった。本書は今までの研究成果に新知見をくわえ、わかり易い構成となっている。それは、本書がこの問題を理解するうえでの認識の道筋にそって構成されていることによろう。

1の「南京アトロシティー」では、1937年12月

の大虐殺が、当時どのように世界に報道され反響を呼んだかを、在南京外人報道記者の記録の紹介もかねて述べている。ついで日本においては厳しい言論統制のために政府、軍上層部を除いてまったく知らされなかったことを指摘している。そして敗戦後の東京裁判ではじめて国民の前に事件の全貌が示される。それ以後、事件は回想録や研究によってどのように扱われてきたか、ことに、1970年代の南京大虐殺をめぐる論争、前記の「教科書問題」を契機とする現在の問題のあり様が簡潔に述べられている。

これらをつうじて、われわれは南京大虐殺の問題点がどこにあるのか、またそれを学ぶための基本史料、文献にどんなものがあるかを知らされる。

2の「捕虜の集団虐殺」では、まず南京大虐殺の評価が大きく岐れる原因の1つに虐殺の定義があいまいである点を指摘し、従来の虐殺の内容、定義を批判的に検討し、従来一部の研究者が市民にたいする直接的な殺害行為と便衣兵と誤認された市民の殺害のみを虐殺であるとするのにたいして、著者は投降兵や捕虜の殺害も虐殺に加えることを主張している。「武器を捨て、抵抗の意志を放棄した者を殺害したのは、国際法違反であるばかりか、それ以前の人道上の問題である」と。著者の見解は正当である。

著者の考察は、なぜ捕虜の虐殺はおこったのかにおよび、その原因を1つには、日本軍隊にみられる中国蔑視の思想と、2つには、日中戦争を「支那事変」と称し、戦争でないから交戦法規は適用されないとする軍の手前勝手の論理に求めている。これらの考えに基づいて軍や師団の命令もしくは指示により組織的な捕虜虐殺がおこなわれたことを著者は豊富な史料であきらかにしている。

3の「市民への虐殺行為」についても著者の論証は明快である。そしてこれらの犠牲者の数については、中国紅卍字会、崇善堂の埋葬記録その他の証言にもとづき、洞富雄氏が従来から主張して

いる中国軍民あわせて20万人をくだらないだろうとする意見に同意している。

最後に、著者は「なぜ大虐殺はおこったのか」を問い、第1に、明治以来の日本軍隊の特質としての、兵士の人権無視、非合理的な精神主義、エリート幕僚層の下剋上の傾向をあげ、第2の日中戦争の性格として、名目なき戦争、兵士にとって戦争目的の不明確が軍紀の頹廃、非行の続出となったことを指摘する。そして、南京攻略戦の特殊事情としての計画性のなさ、中国民衆の抵抗からくる民衆敵視、攻略戦の包囲殲滅戦的事情、これらが相乗しながら、南京大虐殺に結果したとする。

これらの原因究明は、南京攻略戦を「中世的戦争」として、日本軍の虐殺を弁明したり、あるいは戦争一般に混乱はつきものとする恣意的な解釈にたいして、日本の侵略戦争、軍隊の歴史的性をあきらかにしながら、虐殺のおこった原因をあきらかにしたものとして、南京大虐殺を考える重要な論点を示すものである。

今年8月、南京市は城外の江東門附近の虐殺埋葬死体の白骨が層をなして発掘された場所に記念館を建設し、南京大虐殺の歴史的教訓を子々孫々に伝えていくという。

われわれにとって南京大虐殺を過去の事件としてあいまいにすることは許されない。中国側の主張する虐殺者30万ないし40万人という数をそのまま鵜のみにする必要はないが、今後とも日中共同の調査、研究によって真実をあきらかにすることこそ、真の日中友好をきずくための基本作業の1つであろう。

その意味で、本書は南京大虐殺を考えるうえでのすぐれた入門書であるとともに問題提起の書であるといえよう。

補) 本稿執筆後の8月15日、江東門の記念館は開館され、同時に中国側は大虐殺に関する資料集を刊行した、と朝日新聞は伝えている。

(1985年4月刊、A5判、64頁、250円)